

---

# 追い詰めないのが愛

えんぴつ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

追い詰めないのが愛

### 【コード】

N0114C

### 【作者名】

えんぴつ

### 【あらすじ】

ある日、役所務めの父親が、恥かしい事件を起こして逮捕された。混乱する母親、じいちゃん、姉、そしてぼく。普通なら家族崩壊っ  
て感じだけど、ぼくの家はかなりヘンで……。

追い詰めないのが愛

「ホレ、あの、角の田中さんち知つとるじゃろ。息子さんが入院を繰り返してた。嫁さん、とうとう出て行っちゃったらしいぞ。まだ小さい孫2人抱えて、ばあさん、こぼしとったよ。病気の息子さんも哀れだけど、ありゃ、ばあさんが大変だ」

「私の友達のお父さんなんか、ネットで若い女と知り合って、帰って来ないんだってさ。お母さん、シヨックで鬱になっちゃって、もう家の中、メチャクチャだって」

「ぼくのクラスの友達の家も、お父さんの会社が倒産しちゃって、『家のローンどうするのよ！』って、毎日、夫婦ゲンカなんだって。その友達、塾に来なくなつたよ」

「よかつたね〜うちは。お父さんが健康だけが取柄の公務員で。そりゃ、裕福じゃないけど、とりあえずいまの生活は保障されているんだから。あははは」

それは、ぼくと母さんと姉さんとじいちゃんの4人で、夕げの食卓に座り、いつものように父さんの帰りを待っていたときのことだった。

公務員の父さんの帰宅時間は5分と狂わず、いつも決まって6時半には玄関のチャイムが鳴る。

が、この日はチャイムは鳴らずに電話が鳴った。

そしてその電話に出た母さんが「け、警察！」と叫び、「は、は

い。いますぐに参ります」と言つて電話を切ると、すつ飛んで警察に向かい、2時間後、テレ笑いを浮かべた父さんと一緒に帰つて来た。

一体、なにがあつたんだろ？ 父さん、スリにでもあつたのかな？ それともオヤジ狩り？

ぼくと姉さんとじいちゃんの前で、母さんは怒りで身体を震わせていた。

「……父さん、駅の階段で手鏡使つて女子高生のパンツ見て捕まつたんだつて。市役所もクビだよ。まったく……」

とここまで言つて、これまで警察でガマンしていた怒りが、一気に爆発した。

「くだらねーもん見やがつて。そんなに見たいか。おーし、見るよ、ほら、三面鏡跨いでやつからよー」

「あ、いや、母さんのはどうも……」

「じゃ、彩子、このエロ親父に見せてやりな。女子大生のじゃダメか？ 女子高生じゃなきゃ、どうなんだよー！」

「あ、ちょっと見たい。でも、娘のは父親として、いかななものかと……」

「まったく、もう母さん情けないよお」

そう言つと、母さんは床にうずくまつて泣き伏した。

「パンツ見ると、警察に捕まるのか。わしは腰が曲がってるから、女子高生のパンツなんかイヤでも見えるぞ。イヤじゃないかの」

最近、軽く痴呆が進んでいるじいちゃんが笑った。

「私が風俗で働けばいいんですよ。父さんの給料ぐらい軽い、軽い」  
短気な姉さんが結論を急いだ。

姉さんが言っていること、ぼくはちょっと違うんじゃないかなー  
と思っただけど、父さんはすかさず

「そっか、売ってくれるか。いやー助かるな父さん。彩子がそう言う  
ってくれて。じゃ、父さん、甘えちゃおっかなー」だって。

これには泣き崩れていた母さんも黙っていない。

「あんだ、親として恥ずかしくないの！」

「いや、売れるモノは売れるウチに売つとかんとな。母さんじゃ、  
もう売れんし……」

「世の中知らないねえ、父さんは。だから役所でも出世できないん  
だよ。いま熟女ブームで、私だってまんざらじゃないんだから」

母さん、話の方向性が違うんじゃない……。

「じゃ、まず母さんから売るといふことで。竜太郎だって、新宿2  
丁目で立派に商売になると思うぞ。どーだ、女にばかり世話には

なれんぞ、竜太郎！」

「えー！！ ぼ、ぼくはまだ女も知らないのに、いきなり男相手はやだよお」

と、母さんがガバツと起きて、「じゃ、知つとくか」。

え、え。

さらに姉さんまで、「大体、竜太郎、そういうのは性差別だぞ」と、わけの分からないことを言い出した。

な、なに？ 「冗談でしょ？ なんでこんなときに、冗談が言えるの？」

「もう分かった、分かった。父さんはうれしいよ。みんな家族のために、自分の身体を売る気があるのが分かって。すばらしい絆、すばらしい家族愛だ。でも、みんな大丈夫だぞ。かわいい彩子や竜太郎に大切な身体を売らせたりするもんか。な、母さん。こんなときのために我が家には蓄えがあるもんな。ボーナスの半分、いつも貯めてる例のあれ。500万くらいあるのか？」

母さんの顔が曇った。

「あ、あれね、え〜と、あれは、パチンコでなくなっちゃった。あははは」

「なんだとーてめー。俺が下げたくもない頭をぼんくら市民のために下げ続けて、稼いだ金をパチンコでスツただと〜」

「わ、私だけじゃないよ、じいちゃんだって、彩子だって、もうみんなパチンコがヘタで困っちゃおう〜」

「売れ！ いまこの場でテレクラに電話して、全員売って来い！」

父さん、自分の立場も忘れて烈火のごとく怒り出した。

「わしも売れるかのお」

「じいちゃんが売れるなら、俺が売るわ」

「ぼくは、パチンコしてないし」

「うつせー、竜太郎は連帯責任だ」

なにが連帯責任だ。父さんが女子高生のパンツなんか覗くから、こっとなつたんじゃ  
ないか。

大体、母さんも姉さんも、なんで身体を売ることばかり考えるんだろ？ それより父さんの不祥事をもう少し責めればいいのに。本人、反省してないみたいだし。

みんな突然の我が家の危機に気が動転してるのかなあ。

「ね、別に身体売らなくても、とりあえずみんなでバイトでもすれば、うちの場合は暮らしていけるんじゃないの。だって、ローンとかなないんだし」

ぼくは、ごく当たり前のことを言ってみた。

「それもそうだな。父さん、ちょっと頭が混乱してた。なんせ初めてのことだから、役所クビになるの。あはは。そうだ、4人でバイトすれば40万くらいになるもんな。おーよかった、よかった。母さんと彩子とじいさんは、2度とパチンコなんかするんじゃないぞ。父さんももう女子高生のパンツは覗かないから」

「頼みますよ、お父さん」

へ？ 母さんニコニコしている。

「雨降って地固まるだね」

姉さんの言葉に、ぼくが固まった。

「よかった、よかった。これで我が家も安泰じゃ」

そう言つと、じいちゃん、姉さんのお尻を撫でた。

「もう、じいちゃんったら……」

「あははははは」

確かに我が家はなにがあっても崩壊しそうにない。なぜなら、すでに壊れているから。

でも、あつたかいからいいや。

(後書き)

痴漢行為に“甘い”とか、叱られそうですが、単なるドタバタコメディーです。ただ、最近の親子の暗い事件を聞くにつけ、なんかもっとオープンな家族だったらって思います。もちろん、こんな家族は論外ですが。

追い詰めないのが愛

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0114c/>

---

追い詰めないのが愛

2008年11月7日06時32分発行

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。